

優秀賞

高校生部門〈問題提起している作品〉

鹿児島県立武岡台高等学校1年

西川 龍成

人のために生きる

私は、「死」のことについて色々と考えたことがあります。その中でも人の死に方にも様々あり、病気や事故などある中で私は安楽死・尊厳死に関心をもっています。そもそも安楽死・尊厳死とは、助かる見込みのない患者を、本人の希望により、できるだけ楽な方法で人為的に死なせることと辞書に書かれています。この事に興味をもった私は、評論「命は誰のものなのか」というのを読みました。この本の冒頭部分に「僕に死ぬ権利をください」というヴァンサン・アンベールの実際の体験が書き記されています。このヴァンサン・アンベールは十九歳の時に交通事故に遭い病院に着いた時は、医師はもう諦めるように言ったが、母親はあきらめなかった。九カ月の看病の後に、ヴァンサンは奇跡的に意識を取り戻した。しかし、意識を取り戻したヴァンサンは体は全く動かず、目は見えず、耳は聞こえるが、声は出せず、非常に惨めであると感じていた。そういう事もあってか右の親指で「死にたい」という意思を伝え、死に至ったと言う。この話を読んだ著者の柳澤桂子さんもこのような体験があったというふうに書かれています。そこで柳澤さんはこう思ったと言う。「苦しみに耐えられないから、点滴を抜いてほしい」というと、家族の驚きは、私の予想をはるかに超え、私は命が自分のものではないと感じた」と。

私たち人間は、四十億年の間、とぎれることなくDNAが複製され続けて生まれてきたものである。柳澤さんは、絶望の淵に追い込まれた中で、周りにいた大勢の人たちの支えを知り、「命は自分のものだけではない」と感じたその瞬間から生きぬく力をもつことができた。私自身も日頃から周りにいる家族・友人などを大切にし、一人では生きられないことを自覚し、これからともに助け合って生きたいと思います。